



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.270
2026.3.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— 『日本先史土器図譜』と現在 —

鈴木 正博

● 第68回 ● 「加曾利B2式」奥行の再吟味

『図譜』「B2式」は深鉢・鉢・浅鉢等の各器種「**範型**」標本として**遠部包含地**(池上啓介(1937)「千葉県印旛郡白井町遠部石器時代遺蹟の遺物」『史前学雑誌』第9巻第3号)及び**江原台遺蹟の斜線文土器**(学史的に著名な「**遠部第2類土器**」:前掲も原文の漢数字は算用数字に改変)を主に選定すると共に、層位と型式学の検証により他に「**遠部第1類土器**」(図版33-1・2)や「**遠部第3類土器**」(図版37)等を加える。標本以外にも伴存関係からは「**遠部第4類土器**」(『図譜』「B1式」とは異なる**新たな文様構成の「半精製土器様式**」)、及び「**遠部第5類土器**」(幾何学形磨消縄紋の「**緩衝系列**」、希少の「**大森系列**」、そして**括れ部相当を刻文帯とする縄紋地並行沈線文の「下総系列**」等断片の混成)が「**型式組成**」の検討対象となり、単純な形態・装飾の「**遠部第4類土器**」は層位的にも問題が無く、寧ろ断片ながら多様な文様帯を含む「**遠部第5類土器**」の実態究明こそが課題となる。特に山内清男を含めこれまでも単品仲間が公表されている「**緩衝系列**」は、「**斜線文土器**」との層位関係や複数個体による文様帯の検証は不問に付される傾向にある。

愈々21世紀に突入り印旛沼西北岸の印西市**西根遺蹟**(出典は本連載第56回参照、以後略)で**加曾利B式の地点別層位別資料**が報告され(本連載第64回第71図参照)、「**斜線文土器**」等の「**遠部系列**」主体性も**第4集中地点**にて確認されるに及び、『図譜』「B2式」と西根遺蹟第4集中地点の器種「**範型**」による可視的比較が可能となり、第77図が導出される。

—: 未見 ○: 類似の器種「範型」 ◎: 同一の器種「範型」

『図譜』「B2式」図版番号	30-1	30-2	31-1	31-2	32-1	32-2	33-1
西根遺蹟第4集中地点	◎	◎	◎	◎	-	◎	○
『図譜』「B2式」図版番号	33-2	34-1	34-2	35-1	35-2	35-3	36-1
西根遺蹟第4集中地点	○	○	○	○	○	-	○
『図譜』「B2式」図版番号	36-2	37	38	39-1	39-2		
西根遺蹟第4集中地点	◎	○	-	○	-		

▲第77図: 『図譜』「B2式」図版と西根遺蹟第4集中地点の器種「範型」比較表

西根遺蹟第4集中地点を俯瞰するならば、第77図は「**斜線文土器**」に加え、「**遠部第1類土器**」や「**遠部第3類土器**」を含めての「**遠部系列**」としても『図譜』「B2式」との類似性が際立ち、「**遠部第4類土器**」も認められる。他方で『図譜』「B2式」の「**奥行**」としては、文様帯が「**遠部第2類土器**」とは異なるものの新たに「**吉見台系列**」の「**道統**」から出現する「**斜線文系変容文様帯**」土器群(図示省略)が異彩を放つと共に、「**遠部第5類土器**」の新たな仲間も層位的に導出される。

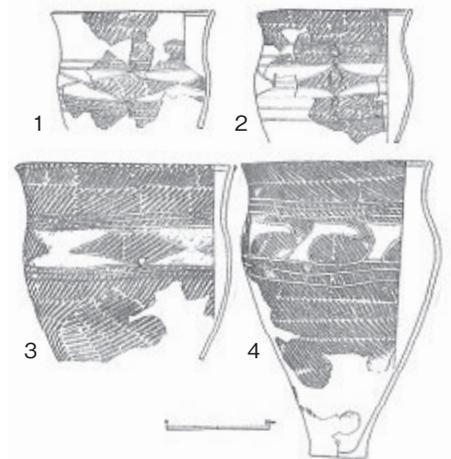
そこで西根遺蹟第4集中地点の「**遠部第5類土器**」相当として「**遠部第1類土器**」から「**遠部第4類土器**」までに該当しない**縄紋施文の有文土器群**を選定すると、まずは「**遠部第5類土器**」から「**下総系列**」の欠漏現象が明らかになる。この欠漏現象は続いて解説する**新たな仲間**と一体となることから、『図譜』「B2式」の「**奥行**」には遺蹟間の型式学的引き算が成立すると共に、「**遠部第5類土器**」相当による**地域差と年代差の再吟味**も射程に入る。

次の再吟味は西根遺蹟第4集中地点に於ける『図譜』「B2式」の「**奥行**」追求である。前述「**斜線文系変容文様帯**」は非対象とし、「**遠部第5類土器**」を補足する新たな仲間は、「**中妻系列**」(口縁部縄紋帯かつ体部の膨らみ部を文様帯とする「**B1-2式**」)の「**道統**」を継承し、**粗製化や大型化変容した新たな「半精製土器様式**」に目を向ける。そこそが第78図であり、「**細別**」も射程に入る。

第78図1・2は「**中妻系列**」から「**B2式**」初頭への接続的な粗製化変遷で、「**続中妻系列**」と命名する。1は主文様を「**磨消菱型文**」とし、**文献(1981)**では「**中妻系列下総類型石道谷津形式**」とした経緯もあるが、西根遺蹟の層位を踏まえた年代と系列としてここに訂正する。2は主文様を磨消縄紋の「**横連対弧文**」とする**文献(1981)**の「**中妻系列大森類型**」由来の「**道統**」で、大形に伸長した弧線を配置する。主文様上下には共々「**横線帯沈線文**」と「**区切り対弧文**」等を施文する。

一方、その「**続中妻系列**」から変遷し大型化する例が第78図3・4で、「**西根系列**」と命名する(本連載第63回参照)。「**西根系列**」への変化は共々「**横線帯沈線文**」から「**区切り対弧文**」等が消失すると共に、幾何学形磨消縄紋は主文様として大柄化する。

畢竟、「**吉見台系列**」との連絡が1・2に、「**遠部系列**」との交渉が3・4に指定され、1→3へは「**道統**」変遷を辿り、異質な主文様の4は次回触れる「**緩衝系列**」との「**文様帯ブランチ**」現象である。



▲第78図: 西根遺蹟第4集中地点に観る「**中妻系列**」の「**道統**」

※巻頭連載は隔月です。次回は鴨志田篤二さんです。

目次

■加曾利B式土器 「加曾利B2式」奥行の再吟味(第68回) 鈴木正博 …1
■考古学の履歴書 私の考古遍歴(第19回) 工業善通 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第262回) 佐藤 拓 …3
■考古学者の書棚 『諏訪信仰史』 滝澤 誠 …4

考古学の履歴書

私の考古遍歴 (第19回)

工楽 善通

デンマークから帰国後、翌朝にはF.シューベルト(F.Su.以下同称)さんとの約束通りにフランクフルト入りした。氏に案内されて到着したドイツ考古学研究所のフランクフルト支部の建物は、市の観光名所となっているパルメンガルテン植物園(18C.初頭開園)入口の西脇に立つ四階建の四角いビルであった。1~2階は各研究室で、3階は食堂と管理人ご夫妻の住居となっていて、4階がゲストルームになっており、私は4階の1室を与えられた。今後のスケジュールを打ち合わせた後、F.Su.さんが日用品を一緒に買いに行こうというので、近くのマーケットへついていった。私にとって棚に並んでいるもの全てが珍らしく、しばらくは自炊だと聞いていたので、あれもこれもカゴに入れていたら、F.Su.さんが「それは贅沢だ!」と棚へ戻し、大きな大根一本と牛乳パックを入れてくれた。氏曰く、冷蔵庫に入れておき、毎朝パンと大根ヲロシに牛乳かけて食し、それで充分だと教えてくれた。ドイツ人のケチなことは知っていたが、ここまでと驚いた。しかしこの教訓は後々旅を続ける上で役立った。そして研究所に戻ってから、地下1Fにある図書室を案内してもらった。さすが創立150年近い歴史のある研究所だけにすごい蔵書量で、稀覯本は特別に一室設けてあり、ヴィンケルマンの考古学史上重要な『古代美術史』(1764)が目に入った。部屋を出ると全図書室の鍵の綴りを渡され、夜中でも自由に閲覧できるからと言われた。これにはほんとに恐れ入った。日中は外出することが多いので夜に2度利用した。地図類もずいぶん揃っていたので何か所かの古地図を広げて鑑賞した。

フランクフルトは観光案内書でよく紹介される風景に、木組みを露わにしたドイツ風のティンバーハウスの旧市役所の三棟の建物が有名で、近くには市立歴史博物館があり、少し離れて大聖堂と塔があって、その間の敷地には、かつて発掘したのでらう、ローマ時代から中世にかけての遺構が復元されていて、丁寧な説明がしてあった。博物館では付近からの出土品や中世の鉄製武器類、キリスト教関係遺品等が多数並べられていた。近くのメイン川を橋で渡った南側にも工芸博・建築博・映画博・通信博・美術館などあって、街路名もレンブラント通りやベートーベン、モーツァルト、ゲーテ、グーテンベルグなど文化人の名を冠していて、実に楽しい町である。研究所から歩いていける所にゼンケンベルグ自然博物館がある。中央入り口の左右に伸びる石造りの4階建の重々しい建物である。受付を過ぎるとすぐ天井の高いホールとなっており、床に所狭しと巨大な恐竜などに骨格標本が生き生きと並んでいた。この奥のブースには人類登場の解説と発掘した化石人骨や石器等が実に分かり易く展示してあったのは印象的であった。続く鉱物や動・植物の展示も充実しており、当時わが国の上野の国立科学博物館や、1974年4月にオープンした大阪市立自然史博物館は標本数の点でとても及ばない一と感じると共に、単に狭い国土だからと言う理由だけではなく、自然史に関する意識の違いにあるのだらうと思った。

フランクフルトに居る間に、ライン川沿いのケルン・ボンに行くよう勧められて出かけた。ケルンでは駅前の大聖堂脇にあるローマ・ゲルマン博物館を見学した。新しい2階建の瀟洒なビルで、地階は、ここで発掘されたローマ時代の建築遺構が、その出土品と共に展示され、上階は周辺の発掘品が、旧石器から新石器時代迄、壁面をうまく使って展示されていた。2階の吹抜け部からは地階の床に復元されたローマ時代の色鮮やかなモザイクが見降ろされて、目を楽しませてくれた。午後にはケルン大学のリュウニツク教授を訪ね、周辺の考古学事情について英語でお教えを受け、夜にはビールとムール貝をふんだんにいただいた。翌日はF.Su.さんの弟のエッカート・シューベルト(同研究所の考古学研究者)さんと落ち会い、ケルンの西方約50kmほど離れたエッシュバイラーというところで、ローマ時代の集落を発掘している遺跡へ彼の車で連れて行ってもらった。遺構は地表下50cmくらいで出ているが、その下約30m余の底で石炭の露店掘りをしているという。その底には巨大なキャタピラーのついた全長20mほどの掘削機が動いており、幅5mも

あるベルトコンベアーにどンドン石炭を乗せているのではない。この機1台の稼働には300人を要するのだらう。そして1日に地表を3m削り取って進んでいくそうで、これぞ正しくレスキューアーケオロジーで、深刻だと嘆いていたのを思い出す。20世紀終わりの頃の新新聞記事では、この石炭露天掘り跡の各地にある広大な凹地処理が問題になっていて、所によっては或る程度埋め戻して人工湿地として野鳥の楽園となり、再生自然景観として人気を呼んでいるという報道があった。

ケルン南のコブレンツから列車に乗って、モーゼル川に沿って進み、約1時間でトリアーという小さな町に着いた。ここはローマの植民地だった所で、その遺構が各所に残っていることで有名な所である。駅から歩いて10分くらいの所に、写真で良く紹介されるポルタニグラ門があり、季節から紅葉した蔦蔓に絡まれた石造三階建の建築は実に美しく、よくぞ残ったものだと感じた。さらに10分余の所にモーゼル川にかかる石造の橋があるのだが、帰路の列車の都合で見学はあきらめざるを得なかった。

ケルンからボンに移動して、駅から歩いてさほど遠くない所にベートーベンの生家があって、ベートーベンハウスという博物館となり公開しているので見学した。そして目的のラインラント州立博物館を訪ねた。玄関に入って、まず正面にあったのは二重のガラスケースで保護されたネアンデルタール人の有名な頭骨(1856年発見)が展示されていた。ケースには防犯対策用の電気コードも配線されていた。周囲には旧石器時代関係の出土品の展示や解説があったが、今ほとんど記憶にない。フランクフルト最終日の前日にはF.Su.さんの案内で近郊のザールブルグにある古代ローマ帝国の国境壁(リーメス)と要塞の遺跡を見学した。(これについては既に『郵政考古紀要』第58号2013年に記述済のため省略) 午後にはフランクフルト南西にあるマインツのローマ・ゲルマン博物館とその付属の文化財修復研修所を見学した。館と研修所は、ローマ・ゲルマン委員会と言う組織が運営しているのだらう。館のDr.K.ワイデマン氏に案内してもらった。戦後に建った2階建で窓からはライン川の流れが良く見えた。周辺から出土した考古遺物が多く展示されていた。修復研修所の方は、今のシーズンは休暇中で、修復作業等を参観することは出来なかったが、広い陳列室のガラスケースいっぱい、生徒たちの出来の良い修理品や模造品が展示されていて大変参考になった。今迄に日本の文化財関係者の何人かこの卒業生がいるはずである。

日本を離れてもう1か月以上が経ち、いよいよミュンヘンの研究所を訪ねる時が来た。朝6時過ぎにフランクフルト駅をファン・ベートーベン号という特急列車で発って、ミュンヘンの1つ手前のインゴルシュタット駅に4時間ほどで着いた。ここでF.Su.さんと落ち合い、郊外にある古代ケルトの防壁に囲まれた大集落であるマンチン遺跡を案内してもらった。この遺跡については、F.Su.さんが75年に奈文研への来訪の際、研究所員にスライドを写しながら説明してもらっているの、ある程度は理解していた。19世紀中頃に発見され、研究の対象になり初めた点や、国の機関が継続的に発掘調査を進めているという点で平城宮跡と共通するところがあって、彼も興味をもってきているのでらう。

(マンチン遺跡に関しては、小野昭著『ドナウの考古学—ネアンデルタール・ケルト・ローマ』2024・3月刊 吉川弘文館 参照) (続く)

略歴	
1939年	兵庫県高砂市に生まれる
1958年	兵庫県立高砂高等学校卒業
"	明治大学文学部史学地理学科入学
1964年	同 大学院修士課程修了
"	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部へ入所
1969年	文化庁記念物課へ出向
1973年	奈文研平城宮跡発掘調査部第2調査室へ配属
1992年	奈文研飛鳥資料館 学芸室長
1995年	埋蔵文化財センター長
1999年	奈良国立文化財研究所定年退職
"	(財)ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所勤務
2001年~2021年3月	大阪府立狭山池博物館館長

隔月連載です。次回は山本暉久先生です。

Uレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 262

嵯峨野の古墳群 ～京都市

佐藤 拓

京都駅から北西に約8km、JR嵯峨野線で20分ほど揺られると、観光地として名高い嵐山界隈の最寄り駅、「嵯峨嵐山」駅に至ります。この駅の周辺や北方の台地上は、「嵯峨野」と呼ばれる地域です。嵯峨野地域は、東を双ヶ岡・天神川、西を桂川に挟まれており、北の山麓から南の沖積地に向けて緩やかに傾斜する低位段丘が発達する地形を持ちます。この地域、特に北半一帯では200基近くの古墳が確認されており、これらは①南側の平野部に前方後円墳が単独で、②低位段丘の中でも少し高まっている箇所や、丘陵上に比較的大きな円(方)墳が群をなして、③北側の山麓頂部や尾根上、裾部にかけて小さな円(方)墳が密集するという、3つのグループに大別されることが知られています。5～7世紀にかけて築かれたこれらの古墳の一部を紹介します。

嵯峨嵐山駅から南東に約700m、住宅地の中に突如として巨大な石室が現れます。幅3.6m、高さ3.2mの巨石が用いられ、全国4位の玄室面積を誇る巨大な横穴式石室を持つことで知られる国指定史跡「蛇塚古墳」です。現在は墳丘が失われていますが、元々は全長75mほどの前方後円墳だったと考えられているこの古墳は、他のグループの古墳よりも規模が大きい①のグループに属します。この地域の最有力者である首長が埋葬された古墳でしょう。なお、京都市文化財保護課に申請すれば、自由に石室を見学することが可能です。

②のグループに属する古墳は、後述する③のグループの古墳と同じ形をしています。より大きな墳丘を持ちます。大覚寺の南に位置する大覚寺1号墳(円山古墳)は径55mを測り、盗掘されていたものの豊富な副葬品が出土しました。双ヶ岡一の丘頂上に位置する双ヶ岡1号墳は、蛇塚古墳に匹敵する大きさの石室を持つ径44mの円墳です。形は同じですが、双ヶ岡に築かれた他の古墳よりも大きく、有力者が埋葬された古墳でしょう。

最も数が多いのは③のグループに属する古墳です。広沢池の北東に連なる丘陵の裏とその谷筋にある「御堂ヶ池古墳群」は、径30mの1号墳と径8～15mほどの小円墳多数からなります。残念ながら道路・宅地造成工事に伴い大半が未調査のまま姿を消しましたが、工事の最中京都大学考古学研究会の協力のもと京都府教育委員会が調査を実施しました。この開発問題が契機となり、京都市に「文化財保護課」が設置された経緯

から、京都市における文化財保護の歴史を語るに欠かせない遺跡です。現在、移築された1号墳の石室が京都市史跡に登録されています。

東映太秦映画村の北東で行われた発掘調査では、径15～20mほどの円墳が複数検出されました。「常盤東ノ町古墳群」と呼ばれるこの古墳群は、扇状地上の微高地に築かれた古墳群です。墳丘は既に削平されていましたが、被葬者が埋葬された石室や、古墳の周溝がのこっていました。このような削平古墳は御堂ヶ池古墳群でも見つかり、既に道路が敷設され消滅したとされていた古墳が、下水道工事の際に「再発見」されたことがありました。地上からはどこにあるかわからない削平古墳。今後さらなる古墳の発見が期待されます。

これら嵯峨野の古墳群を多角的に分析した立命館大学名誉教授の和田晴吾氏は、この古墳群のあり方は当時のヤマト王権による支配制度を反映していると考えました。この古墳群の特徴は、①が地域の首長層、②が付随する有力者層、③がさらにその下の階層の人々の墓といったように、その立地や大きさなどによる階層構造をもっていることです。①や②のグループに対応する古墳は5世紀以前にもありますが、③のグループに相当するような古墳は主に6世紀以降に築かれます。これまで古墳を造ることのできなかつた人々が、古墳を造るようになるのです。これは、これまで各地の首長層や有力者層と関係を持っていたヤマト王権が、6世紀以降有力者層の下をも取り込み、その影響下に置いたことを示します。「群集墳」と呼ばれる③のグループの登場は、ヤマト王権の権力拡大を物語っているのです。この新たに登場した③のグループは、嵯峨野のみならず、時をほぼ同じくして日本全国で出現します。この時代の変化は、ヤマト王権の勢力下では概ね全国共通の動きと言えるでしょう。嵯峨野の古墳群のあり方は、当時の日本列島社会を如実に表しているのです。

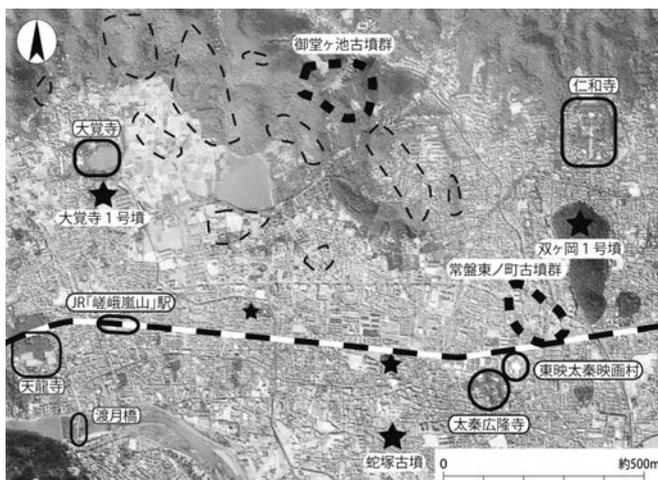
では、この古墳群を築いたのはどのような人々でしょうか？この嵯峨野地域には、「秦氏」と呼ばれる渡来系氏族が開墾したとの伝承がのこります。高燥で稲作に適さなかつた嵯峨野の台地を開墾し、発展させたのは彼らとされています。聖徳太子との関係がよく知られ、太秦広隆寺を建立したと伝わる「秦河勝」は、この秦氏の出身です。彼が活躍したのは6世紀後半から7世紀前半にかけて、嵯峨野に古墳群が築造される時期にあたります。このことから、嵯峨野の古墳群は秦氏の墓と考えることができます。しかし、副葬品や墳丘など、他の渡来系氏族の古墳で見られるような諸要素が見られず、本当に渡来系氏族の墓か疑問符をつける意見もあります。今後の調査・研究により、被葬者が明らかとなる日がくるのでしょうか？

嵯峨野地域に広がる古墳群、マクロな視点からは日本列島の古墳時代社会を、ミクロな視点からは地域の開発者像を考察することができる、とても興味深い遺跡です。

参考文献：

宇野隆志2012「平安京以前-古墳が造られた時代-」京都市文化財ボックス第26集、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課
和田晴吾2011「京都・嵯峨野の古墳と他界観」『京の地宝と考古学』立命館大学京都文化講座「京都に学ぶ」6、白川書院

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは中谷俊哉さんです。



▲嵯峨野地域 古墳群

考古学者の書棚

「諏訪信仰史」

金井典美 著／名著出版(1982)

滝澤 誠

はじめに

長野県の中央部、霧ヶ峰山中の標高1,600m付近に旧御射山遺跡という祭祀遺跡がある。現在でも階段状の地形が残り、人里離れた山中にあるにも関わらず、その一帯には大量の土器片が散布している。筆者は学生時代に「諏訪信仰史」を読んで遺跡の存在を知っていたが、実際に訪れたのは就職した後のことであった。現地を訪れたところ大量の土器細片が落ちている状況を目にし、興味を持った矢先に出土遺物が諏訪市博物館に寄贈されていることを知り、同僚の村山卓と共に遺物を実見する機会を得た。

ダンボール十数箱分の資料があるにもかかわらず、報告されているのはごく一部の資料のみであったことから、再実測をさせて頂けないか伺ったところ、快く了承を頂き、その後2年程かけて実測を行った。その成果は、諏訪市博物館研究紀要7に「旧御射山遺跡出土遺物の再検討」として報告させて頂いた次第である。

本稿の依頼をいただいた児玉利一氏は一連の資料調査の際に大変お世話になった方であり、また大学時代の先輩という間柄でもある。そんな方から譽を受け取ったため、諏訪に関連した本を紹介しようと思い、最初に思い付いたのは金井典美著「御射山」(学生社)であった。しかし私が旧御射山遺跡を知るきっかけとなったのは今回紹介する「諏訪信仰史」であったため、一連の資料調査の原点であり、また遺物の検討の際に大変参考にさせて頂いた本書から、旧御射山遺跡の話を中心に紹介したい。

本書の内容と旧御射山遺跡

旧御射山遺跡は前述の通り霧ヶ峰高原にある祭祀遺跡である。遺跡の地形は三方が丘陵に囲まれた窪地となっており、かねてより丘陵の一部に土壇があることが知られていたが、昭和17年頃に野火によって一帯を覆っていた枯草が焼けたことにより、三方全ての丘陵斜面に階段状の地形が広がることが上田貞氏によって確認された。上田氏はその後地形遺構測量を実施され、得られた成果から外郭が長径370m、短径260mに及ぶ大規模な遺跡であることを明らかにされた。その遺跡の近くに金井典美氏が山小屋を建てたことによって興味を持たれるようになり、金井氏は発掘調査へと突き進んでいく。

発掘調査は昭和34年、昭和38・39年の3回に亘って実施され、調査成果は速報として昭和35・40年に『考古学雑誌』に、また一般向けの報告として先述した『御射山』が昭和43年に刊行されている。本書はそれからやや間を空けて昭和57年に刊行された。

『諏訪信仰史』としてまとめられた本書は研究篇と史料篇に分かれており、文献資料のみならず考古学、民俗学、地理学や神社分布など、多角的な視点から諏訪信仰について述べられている。このような中で「旧御射山遺跡発掘調査報告(総括篇)」として旧

御射山遺跡の調査成果をまとめられている。

はじめに周辺環境や旧御射山遺跡が認知されるようになった経緯と発掘調査の経過がまとめられており、次に遺跡と遺構の解説があり、階段状遺構の規模やその中での遺物の散布状況、トレンチの設定方法と各トレンチから出土した遺物などについて触れたあと、階段状地形についての分析がなされている。斜面部に設定したトレンチの土層断面に階段部を拡幅したと考えられる堆積状況が認められること、斜面部に土留めの礫群が認められることなどから、これらの階段状の地形は人工的に作られたものと判断され、人里離れた山中という立地から中世の山城等は無く、諏訪大社下社御射山祭に関連した遺構と結論付けられた。

続いて遺物の解説があり、トレンチ調査の結果出土した遺物について、種類ごとに述べられている。最も多く出土したものは土師質土器であり、その他の出土遺物についても、それぞれ項目を立てて解説されている。土師質土器には手づくねとろくろ製のものがあり、完形品で見ると手づくねがろくろ製のものより圧倒的に多く、また全体の出土数の割に完形品が少ないことに対して、「土器わり」が行われていた可能性についても指摘されている。

考察では上記の検討の結果判明したことが述べられており、遺跡の年代は出土遺物の特徴を基に平安時代から室町時代とし、階段状遺構の構築年代は盛土下の遺物出土状況から一度に作られたわけではないとした上で、平安時代に祭祀の中心となる場所が作られ、鎌倉時代以降に増築されていったとされた。階段状遺構の機能は各段の幅や高さなどから、御射山祭の際に建てられた穂屋(屋根も壁も草で葺かれた簡素な草庵)の敷地とされた。最後に祭祀遺跡の規模や巨大な階段状遺構の存在から「この遺跡における祭祀が諏訪の地域社会を越えた大きな組織においてなされた」とまとめられている。

このように、内容についてはほぼ発掘調査報告になっているが、衝撃的なのはこれらの調査が金井氏の興味から始まり、こうして報告までされていることである。手掘りの時代とはいえ場所は霧ヶ峰山中で、現在のように近くまで来られる道路も無い中、宿の提供等は金井氏がされていたようであり、相当な出費もあったものと想像できる。しかし、そのようなものは一切撥ね退けてこうして書籍にまでまとめられた同氏と調査を担当された方々には敬服の念しかない。当時の背景や葛藤は『御射山』にまとめられているため、本書と共に是非ご一読いただきたい。

おわりに

学生時代から毎年諏訪大社へ参拝に行っており、何かしらの形で諏訪の地に足跡を残したいと考えていた。そんな折に旧御射山遺跡の再整理という機会を与えて頂いた。60年近く前に調査された遺跡であり、長い年月の間に記録類は失われ、遺物だけが残されている状況であったが、本書が図面類を残してくれて、『御射山』が調査日誌に近い側面を持っていたことから当時の状況をだいぶ把握することができ、大変参考にさせて頂いた。旧御射山遺跡の再整理は「調査の記録は永遠に残るもの」ということを再認識する機会となったため、私も50年後でも使える報告書が作れるように、調査・研究に励んでいきたい。



▲旧御射山社と旧御射山遺跡階段状遺構

アルカ通信 No.270

発行日 2026年3月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行所 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801
 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp
 URL : http://www.aruka.co.jp